

## 優秀賞

### 『夜間飛行』

サン=テグジュペリ著；二木麻里訳、光文社、2010.

尾崎 未華（文学部 哲学科 1年）

「人生に解決策などない。前に進む力があるだけだ。つまりその力を創り出すしかない、そうすれば解決策はあとからついてくる。」（19章 リヴィエール）

皆さんはサン=テグジュペリという作家をご存じでしょうか。彼は今も多くの人に愛されている『星の王子さま』を書いた作家です。自らも飛行家であった彼は「空」が関わる物語を多く書き残しました。

常に死と隣り合わせである夜間郵便飛行という仕事に命を懸けて飛び続ける、『夜間飛行』はそんな人間の勇気と尊厳を問う物語です。主人公は新事業である夜間郵便飛行の責任者であり、地上で指令に当たるリヴィエールという人物。彼は非常に冷徹で部下のミスの1つも許さない厳しい人でした。しかしそれには、ある強い情熱と信念があったのです。当時、飛行機を操縦することは多くの危険を伴いました。しかし、空を飛んで郵便を届けることは、経済や貿易の発展を望むことのできる方法でもありました。そんな中で、リヴィエールは飛行士の命を守ることと将来の希望というあまりに重いものを背負っていました。数々のプレッシャーから目を背けず、リヴィエールは何とか夜間飛行という事業を成功させるため、わざと部下たちに厳しく当たっていたのです。国の発展のために、飛行士を命の危険にさらすことは正しいことなのだろうか、と心のどこかで感じながら、確固たる信念との間でリヴィエールが苦しんでいた矢先、ついにリヴィエールが最も恐れていた事態が起こってしまいます。その時も彼は、自身で定めた宿命に必死に向き合い、飛行士たちの命の震えを感じながら黄昏の空へと送り出し、また毅然とした足取りで自らの仕事へと戻っていくのです。

先の読めない将来への歩みには、違和感や何らかの犠牲をはらんでいて、最後になっても何が正しかったのか、答えは存在しないのかもしれませんが。生死の狭間の中で、リヴィエールは、命の倫理的問題や政治による雑音、圧倒的な自然の強さという壁を目の前に、最善を尽くして戦い抜いていきました。彼のように、不明瞭な挑戦に最善を目指して、自己を見失わずに挑み続ける姿勢こそが成功への正しい歩み方なのかもしれません。何かを成し遂げたい全ての人の「戦い」にこの物語が1つの道標となりますように。